

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20730562

研究課題名 (和文) 幼稚園への支援を通しての自発的発達障害支援整備の推進

研究課題名 (英文) The support for preschool children with suspected developmental disorders using consultation with teachers.

研究代表者

金井 優実子 (KANAI YUMIKO)

北海道大学・大学院教育学研究院・学外研究員

研究者番号：90451442

研究成果の概要 (和文)：本研究では、幼稚園において発達障害の疑われる子どもにかかわる保育者が持つ困難の諸特徴を明らかにした。これに基づき、幼稚園で自発的に気になる子どもへの支援や配慮を進めていけるためのガイド冊子「気になる子どもへの保育ヒント集～要因を整理し、環境を見直し、具体的に対応する～」を作成し、活用をすすめた。

研究成果の概要 (英文)：This research showed the characteristics of difficulty in teachers with preschool children with suspected developmental disorders. And we made the guidebook to care and support for children with special needs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：特別ニーズ保育 保育者支援

1. 研究開始当初の背景

発達障害が広く知られるようになり、適切な気づきと支援が人生早期からライフステージを通してなされることが、2次障害を防ぎ健全な発達支援のために必要なことが知られている。特別支援教育の推進に伴い、現在小中学校を中心に支援体制の整備が進められてきた。一方幼稚園においては、気になる子どもに対する対応は、個別の保育者の資質や熟練に依拠するところが大きく、幼稚園からの支援体制整備と地域資源の活用には、

困難が伴っている。発達障害児への支援システムが未構築の、人口規模の大きい地域の私立幼稚園が、自ら園内で対応していくスキルを高め、発達障害の疑われる園児とその養育者および地域における関係機関との連携を進めるためには、モデルづくりと実践可能なガイドが有効と考えられた。

2. 研究の目的

幼稚園が自発的に発達障害の疑われる子どもへの支援整備を進めていくための要件を明らかにし、一般の幼稚園で生じる諸問題

を平均的に抽出し、さまざまな事例に適用できるガイドを作成することが、本研究の目的である。

その際、幼稚園側から見て、子ども、保護者、地域の資源の3つの方向性に対して、できるアプローチを、保育者の抱える困難に対応して進める事が有効と考えられる。

3. 研究の方法

(1)地域、規模、保育体制の異なる3園の幼稚園で、年間を通して継続的にのべ20回保育コンサルテーションを行い、コンサルテーション事例の収集を行った。収集した事例はデータベース化した。

(2)コンサルテーションを実施した幼稚園の保育者約30人を対象に、アンケート調査を実施し、保育者が抱える困難の実態とコンサルテーションに対するニーズを明らかにした。

(3)データベース化した事例の分析から、幼稚園で支援が必要な事例の典型例を抽出し、コンサルテーションをもとに、エピソード例、子どもの様子や発達状況を観察するためのチェックポイント、チェックポイントの整理から適切な対応の実践ポイントを見出すための対応ヒントに整理し、保育者が活用できるガイドブックを作成した。

4. 研究成果

(1)保育者へのアンケート調査より、66%の保育者がPDD圏の医学的診断のある子どもを担当していたが、ADHD、DCD、LDの診断のある子どもを担当している保育者はなく、MR診断がある子どもを担当している保育者は31%であった。いずれもいる場合に、70%以上の保育者が保育で困ることがあると答えた。一方症状レベルでは、「集団行動が困難な子ども」、「落ち着きなくじっとしてられない子ども」、「自分の思い通りでなければ気が済まない子ども」はいずれも70%以上の保育者が担当しており、いる場合に90%前後の保育者が保育で困ることがあると答えた。「他の子どもにすぐ手がでてしまう子ども」、「会話がスムーズにできない子ども」、「混乱しやすくパニックになりやすい子ども」、「独特のこだわりがある子ども」は、担当している保育者の割合は多くないものの、いる場合に90%以上の保育者が保育で困ることがあると答えた。また、「特定の物事に強い関心をもっている子ども」、「手先が不器用な子ども」、「指示理解に時間がかかる子ども」は、担当していたとしても保育で困るのは半数であった。

このことから、保育者の側から保育上困難を感じるのには、診断の有無や発達障害の特徴に含まれる個々の特徴よりも、保育において集団行動や他児との関係など集団生活を営む際に影響するような特徴に目が向きやすく、その対応のために優先的に支援を必要と

していることが明らかとなった。

(2)保育者へのアンケート調査より、発達障害の疑われる子どもに対して80%以上の保育者は個別に声をかけたり手を貸すなどの支援を行うとともに、他の職員に対応について相談をしていた。しかし、保護者と密に話すようにしている保育者は約60%で、保護者に心配を伝えているのは約20%にすぎなかった。特に、経験年数が5年未満の場合には保護者と積極的に話をしているにもかかわらず、子どもの気になる側面を伝えることが困難であった。他の専門機関との連携を行っている保育者は約40%であった。現在問題に感じていることとして、保育に自信がなく子どもへのかかわり方がわからないと感じている保育者は、経験年数2年未満の場合が多かった。経験年数の少ない保育者は担当している子どもへの対応に苦慮しており、保護者と話を深めていくための余裕がないことが示された。保育者の問題意識は、園の保育体制やカリキュラムのあり方によっても異なり、保育者個人だけでなく園体制の中で保育者支援を行う必要性も示された。

(3)保育者へのアンケート調査より、実施したコンサルテーションの評価を求めたところ、「とても良い」19名(66%)、「どちらかというとも良い」5名(17%)、「未回答(受けていない場合も含む)」5名(17%)という結果であった。どのようなところが良かったか複数回答による結果を図1に示す。

保育者にとっては、コンサルテーションを通して、気になる子どもについて話をしていく中で、子どもの特徴が理解できるようになり、自分の保育を振り返りながらかかわりのポイントが整理できることによって、今後についての見通しをもてるようになることをメリットとして捉えていることが明らかになった。子どもの理解の仕方は、障害にとらわれず保育者との関係で個別的になされ、話をすることによって自発的に進む面もあることが明らかとなった。また、経験や園全体での対応によって、個別の理解を超えて複数の子どもに共通する側面としての障害への理解と対応が進んできていた。

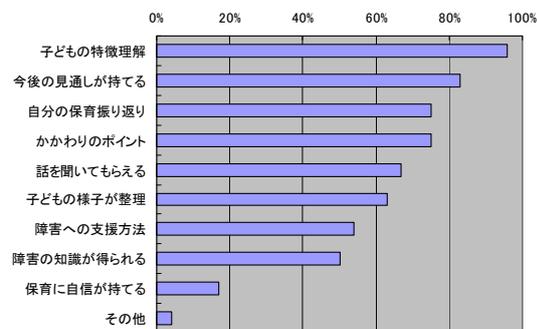


図1 コンサルテーションの良かった点。

(4) コンサルテーション事例のデータベース分析より、収集した事例の構成は次の通りであった。対象園は、地域、規模、保育形態の異なる3園で、コンサルテーション実施回数は20回、収集したコンサルテーション事例はのべ216ケース、実ケース数は74であった。216ケースの性別内訳は、男児ケース162(75%)、女児ケース53(24%)、男女複合ケース1(1%)であった。学年内訳は、年少ケース73(34%)、年中ケース73(34%)、年長ケース70(32%)であった。同一ケースが相談にあがった回数は、最小1回、最大10回で平均2.9回であった。年度初期のコンサルテーション事例数は69(32%)、年度中期は112(52%)、年度後期は35(16%)であった。何らかの診断や把握できる情報があつたケースは102(47%)、ないケースは114(53%)であった。診断の内訳は、PDD圏とその疑いが58(57%)、MR圏が25(24%)、健診での指摘が10(10%)、個性が強い3(3%)、きょうだいに発達障害が6(6%)であった。関係機関のあるケースは102(47%)、なしは114(53%)であった。関係機関の内訳は、医療機関のみ44(43%)、医療機関、通園センター、児童相談所などのかけもち44(43%)、保健センター13(13%)、通園センターのみ1(1%)であった。

これらのデータは、一般的な幼稚園における保育者が対応に困難を感じるケースの平均的な状況を示していると考えられる。各学年にわたって男児に多く保育者が対応に困難を感じることもあり、そのうち何らかの診断や関係機関とのつながりがあるケースは半数であった。保育者が困難を感じる状況は、年間を通して発生し、年度中期は期間が長くさまざまな行事などもあることから、より多く相談が生じやすい時期であった。各ケースは、学年あるいは年度内の時期によって、一時的に保育者にとって問題とされることもあれば、特定の児が年間を通して継続的に支援や配慮を必要とする状況が続くこともあつた。

(5) データベース化した216ケースについて、アンケート調査の結果と相談時の保育者の主訴から、「気持ちや行動の落ち着かなさ」、「不安・パニック・情緒的混乱」、「子ども同士のトラブルと他害行動」、「こだわりに見える行動」、「思い通りにいかないと気がすまない」、「コミュニケーションや会話の難しさ」、「集団行動の苦手さ」、「その他」の8つの項目に分類した。各項目において類似したケースを3~7集め、共通するテーマを抽出したところ、40テーマにまとめられた。1つのテーマは、平均5.4ケースから構成された。各テーマについて、起こりやすい目安として、子どもの学年、年度内の時期、診断の有無などの情報をまとめた。項目、テーマ、起こり

やすい目安のまとめを表1に示す。これに基づき、一般の幼稚園でも自発的に発達障害の疑われる子どもへの支援体制を整備し、気になる子どもの示す諸特徴に対して効果的に対応していくためのガイド「気になる子どもへの保育ヒント集～要因を整理し、環境を見直し、具体的に対応する～」を作成した。

この冊子では、各テーマについて、プライバシーに関する情報を省き、共通する幼稚園における表れ方からエピソード例を示して、必要な情報を検索しやすくした。次に、チェックポイントから、気になる子どもの発達状況や取り巻く環境などのさまざまな要因を整理し、具体的な対応を導く情報の整理ができるようなガイドを行った。この情報に基づいて、保育者および幼稚園の管理者は必要な対応ヒントを見つけ出し、現在の対応を振り返り、具体的にできることのアイディアを出していく機会を持つことができるものとなった。

現在この冊子は、A市における発達支援相談および幼稚園・保育園の巡回相談や、一部の幼稚園で活用されている。

表1 216ケースより抽出された項目とテーマ

項目	テーマ	起こりやすい目安
行動や気持ちの落ち着かなさ	入園後の落ち着かなさ	年少 年度初期～中期
	年中でみられるズレや定着しにくさ	入園2年目の年中 年度初期～中期 診断ある場合もない場合も
	時間の経過で落ち着いてくる場合	年少の年度中期 年中の年度初期～後期 診断ある場合もない場合も
	幼稚園になれた後で出てきた落ち着かなさ	年少～年中 年度中期～後期
	屁理屈の多い年長児への対応	年長 年度中期～後期
	年長クラスでの関係性を生かしたサポートと変化	年長
不安・パニック・情緒的混乱	保育の中でみられるぐずりやかんしゃく	年少 年度初期～中期 診断ある場合もない場合も
	変化やあいまいな場面での不安	年中 入園後の年度初期～後期
	刺激量、見通し、不快な刺激、他児との差で生じる混乱や興奮	年少～年長 診断ある場合もない場合も
	活動の参加困難に関連した不安	年中～年長 年度中期～後期
	情緒的困難を抱えた子どもを幼稚園全体で抱えていく	乳児期からの環境の問題 発達と情緒の問題を併せ持つ
子ども同士のトラブルと他害行動	入園後、友達をたたいたり噛んだりしてしまう	年少・入園後の年中 年度初期・途中入園後
	幼稚園生活に慣れても、友達に手がでてしまう	年少・年中 年度中期～後期
	手が出るだけでなく、攻撃的なことばもでてしまう	年中～年長
	生活では落ち着いても友達とトラブルになる	年少～年長 年度中期～後期 診断がある
	友達とのかかわりの悩みの訴え	主に年長

	発達状況のギャップから受け入れのための配慮が必要	年少 年度初期～中期・途中入園後 診断がある
こだわりに見える行動	入園後にみられるそれぞれの子どものこだわり行動	年少 年度初期
	幼稚園生活に慣れても、続くこだわり	年少～年長 年少の中期以降 診断ある場合もない場合も
	発達障害がある子のこだわり	年少～年長 診断がある
思い通りにいかなしと気がすまない	活動にスムーズに参加できない	年少～年中 診断ある場合もない場合も
	わがままにみられるような自己主張がでてきた	年少 年度中期～後期
	人に注意したり、仕切ってしまう	年少～年長
	幼稚園と療育の間で子どもが混乱している	年長 年度中期～後期 診断がある 療育に通っている
コミュニケーションや会話の難しさ	保育者になつかない、拒否的	年少～年中 年度初期～中期
	伝わっているかわかりにくく、かみ合わないことがある	年少～年長
	なれて話せるまでに時間がかかる	主に年中
	いちいち言わないとやろうとしない	年少年長 年度中期～後期 診断がある場合もない場合も
	理解はできているが発音不明瞭	年中～年長
	発達障害がある子のことばの遅れ	年少～年長 診断がある
集団行動の苦手さ	緊張とかかわりの弱さ	年少～年中 年度初期 診断ある場合もない場合も
	マイペースさと個別の声かけの必要性	年中～年長 診断ある場合もない場合も
	経験の定着のしにくさ	年少～年長 診断ある場合もない場合も
	集団活動が盛り上がる中での逸脱	年中～年長 年度中期～後期
	マイペースなメンバーの多いクラス	年長
	運動面の苦手さから集団の動きについていけない	年少～年長 診断ある場合もない場合も
その他	療育機関、療育機関との連携や情報提供	年少～年長 年度中期～後期 診断がある
	保育には支障ないが家族から出てきた心配への対応	年少～年長
	子どもに対する保護者の苦情や転園	年少～年中

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計◇件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

冊子

金井優実子「気になる子どもへの保育ヒント集～要因を整理し、環境を見直し、具体的に対応する」、83 ページ、2010

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金井 優実子 (KANAI YUMIKO)

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター・学外研究員

研究者番号: 90451442

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: